

先月は画家の荒井慧氏をお迎えし、会誌の詩についての感想や意見、そして桜を描く動機や桜に対する思いの丈を語っていただきました。参考になったのではないのでしょうか。詩作においても一つのテーマを納得がいくまで書き続けることがあっていいのではないかと思います。寡作であってもいい。一つのテーマで一つの詩集を出すぐらいの執念を持てることはすごいことです。

1 コバルトの空の向こうに 小太刀美恵子
わすれなぐさ伝説

このような書きぶりをすると詩がよくなるように思います。「コバルトの空の向こうに」は今まで見せていただいた中で一番抑制が効いていて、整っているかなと思いました。少し少女趣味のところは気になりますが、こんなスタイルで書き込んでみたらいいと思います。「わすれなぐさ伝説」はどうも感心しません。

2 早苗 黒川フミ

「雨上がりの今朝 水田がぴかぴか光り 早苗は乳首にでも吸いついたような顔を見せてくれた」この文節がとてもいいです。

感性の生々しさを大切に展開してください。

3連目の擬人化した呼びかけがどうも平凡になってしまっています。

工夫して欲しいところではないでしょうか。

3 腐食する水(自作) 小林まもる

4 別れ 岡嶋保之

前回と同じテーマの取り組みですね。「迷い」から「別れ」へ大きなテーマが見えてきています。「必ず暖かい春の風が吹いてくる」「いつかきっとどこか出会える」と信じたい気持ちに詩があるとしても弱いものです。誰もそうでないことを知っていて不安になっているからです。たとえ春の風が吹き、誰かとどこかであったにしても、いまの関係ではありえなくなっているはずで。別れの寂しさや、つらさに慰めの言葉はありません。愛しい人に死別された人を慰める言葉があるのでしょうか。ただ同じ時と場所で共感していることしかできません。そのとき詩は共感している物象の姿・形に宿るものと思います。

5 サツキ

武田裕也

詩作の構造として考えさせられました。作者と作品の中の「僕」と「自分」は、それぞれ別ですね。詩作することで色づいてくる「僕」をどういう色・姿に仕上げていくのでしょうか。意図的に追究すると予期せぬ収穫があると思います。

自分 = パレットに浸されて白くなっている。切り刻まれた破片。つながり、貼りついていくまえの僕の姿。

僕 = 思い出がなぎ合わさった自分。今、サツキのようなピンク色

作者 = 作品の中の「僕や自分」を見つめ、なぎ合わせて作品をつくる別のわたし。

6 放蕩息子 あれから幾年かが過ぎました 伊藤賢治

構成された力のある叙事詩といえるでしょう。旧約聖書が背景にあって、その知識が乏しい者には、十分にその意味を読み取ることは困難ですが、解説が助けてくれています。

私が解釈するうえで確心が持てなくて躓いたのは、基本的には「父と息子と作者との関係」です。次に「父とオレとの関係」「昔の父とは」「自分と父との関係」「まことの父とは」「イエス・キリストと父と息子との関係」などです。結局本質的にわからないということでしょう。作者の意図を聞いてみいところで。ところで作者の意図がどうであろうと、作品は作品として作者からは自立しているものです。したがって、このような説明が必要な場合、詩作品としては評価しづらいことになろうかと思います。

資料 第27回鹿沼詩民文化祭文芸部門 詩作品募集について

鹿沼市文化協会の年報と会報について一年会費納入者6人分預かり

石垣りん 朗読 CD